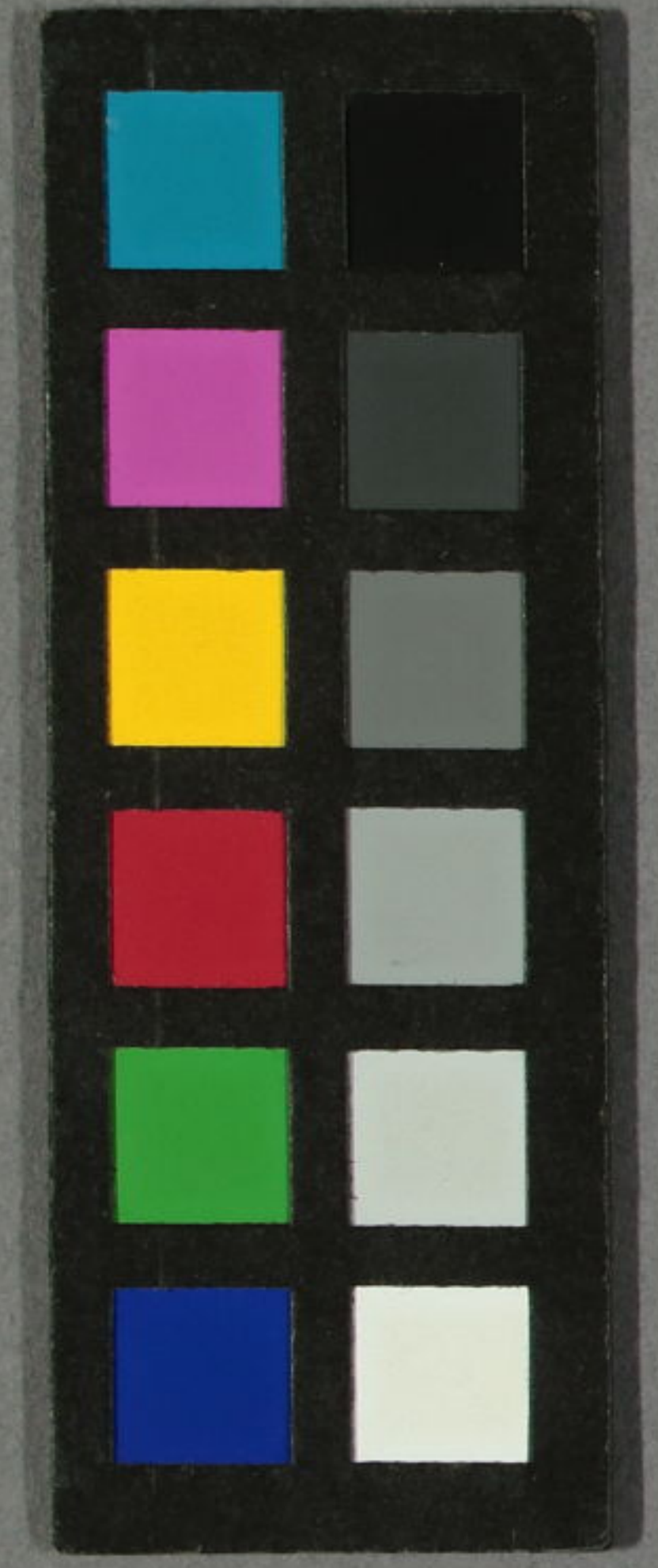


玉川日記五編中

^ 13
3188
10



武指壹冊の月

13
3188
10

松下

昭和十
六月二十五

玉川日記五編卷之中

江戸戯作者

楚滿人改
爲永春水著

第二回

比ふべき方も渚のうはせ貝碎て君を勢のみ
る。お貫ハさくふ身を活す。他る人ハ流外
ハ。成を活さまへん工を恥。狂氣の人のさなを
して。亦十月あもるうぬまご。終て良人の音信
なく。心こころのらちふあふに共。おれるど堅くいひうたじ。

三十一

秘をほめてまを室の一油。きりかきつるゆきを
 一と。家小あつて此身の上を忘る。忘るて在まうさ
 いかげと。喻にのれぬ燃抗。火のつたやうと
 ひみでく。お糸が色に律さきて。こが身を違ふ
 約束の。遅くるもの。何へ鬼もあまじい法を祈
 て乱心の。病のま他して居らるべき。いよく可成
 ぬみうろ。心はくせし甲斐もなく。秘の罪を
 て他人と。樂てこそ在さめと。千々小心を碎
 つ。あひ凝てまう多く。小。伶俐にもうち乱す。質
 あらあうぬ。珠の放。深さるげたハ末はひ小。
 海をもるらん物。あひ小。若さくせむを。かを。
 他ハ空蟬の。かろ衣。乾うぬ袖。を不使る。夫ハ
 休題。漆二郎ハ。中も早く一油を。あげて首尾
 あく。落着く。お貫を傾み。むろへんものと。運ぶ
 足さ。勇はしく。玉川さ。と赴きつ。月元家の。莊
 に。いなり。案内。して律のは。律。小。行へあげ。魚ハ。

高井戸右衛門を始とて。その外上下の役人等。
 書院陝と列を正く。漆二布を呼いどく。中
 にも戸右衛門の声をまげはし。やよ漆二布その方ハ
 柴一抽修復の時より。いほく不陽とあひなる
 ぞ。おれふよりて父井多ハ。今に菟居の座と
 るりし。一抽お糸したるは。サく早く知りお
 と肩りして居丈高。漆一作のどく鎌倉へ持
 来ると修復をいして。を修るさふ古雅根井
 の。さふおあて盗人の。さふ小奴も命をとる。
 此家をさ支奪ひせられ。さてく當惑はつまる。
 夫より百折千磨して。さく尋ね知はし。さ
 今日持来いじま。何とぞよりておん教成
 此家おさめ納られて。父が菟居の由許ひとふ
 お慰ひ中まはと。いひは。さ知の祇を。おんては
 知と一抽ハ。光り輝く古綿蘭泰。くぞ持
 する。戸右衛門とををらちる。役人等もより

五ノ五ノ中

その一瞬もせむことして居たりしが。忽地戸を聲
 おらげ戸へア深二糸の盗人め。わりのいふ質りの
 持参して。身おもらが眼を暗ませ。まんまと罪を
 遁まふ共。不届やりのこよくまひ。此間も中山を
 深谷の多子の古道具屋珍八用養と二人の老
 が。持参する。うる鯉の一抽。こまもまのうる質りの
 るまバ上を敷く不届者と。搦捕て獄舎に繋
 今中二正の方大罪を身お負るがら質りの心。
 け戸をあををめんとなみ。ヤイのめおも夫搦めと
 句の志とより廣庭に警固する。うる雜式足源。也
 こまんとこのいめより早く。むらぐちるとお取まぐ。深
 二糸ハ掛物を質物るりせ。使よりも半ハ繋る死
 半ハ悔え。俯さ居るお取巻る也。今ハ何とせも
 詮方なく。おはてる所を前後より。集とせらんと
 縛めたり。深二糸も今さらんに。巻お夢見く。心地
 しく。さらお前後も日記まへん。夫より獄舎より繋

三ノ三ノ三

口

ぐさして。雲時あまときハらの憂うれ能のの病洞やまのほらの晴間はるまハる
つらり。さして。堀ほり慈屋あやめハ此こゝの風かぜふきつてらり。お
かろた。妻つまのお汲ひハるをさつらふ。此こゝ徑みちの室むろのらせく
より。何なに処ところ不ふお中ちゆうて居ゐる。とあう。懐なつこころ育そだの絶たぎくさ
體ていで。あまの盛さか路ぢ不ふ呻吟うめいんして。病やまがよて居ゐらせぬ
う。死生しせいの際きわさくころ。おねば。まご鬼おにああらん。祈いのや
らんと案あはれ。侘わびて。とあま。洞ほらの乾ぬく障せまもあく。
あ。の月つきあろの。おあひふ。瘦やせる。なる。まふ。り。なる。

を。まご。瘰れい物ぶつを。さじ。上ある。罪つみと。や。と。り。め。暗くらい。所ところ
遠入とほく。居ゐる。此こゝの。因果いんぐわい。心こゝろの。裡うちハ。おの。を。り。で。あ
らふ。ぞ。おの。と。身みを。回まわへ。歎なげき。餘あまり。不ふ伏ふしま。ぐ。と。え。
狂氣きやうきの。ま。く。喜よろこぶ。ハ。狂きやう。せ。め。て。あま。ま。さ。なり。井いま
ゆら。ら。喜よろこぶ。さま。不ふ。彼か。生なま。管くだの。銀ぎん。六む。を。さ。つ。ら。ら。た
弱じやく。宿しゆく。る。ら。ふ。ふ。戸と。を。あ。し。と。六む。殊と。ふ。ま。ご。懇けん。心こゝろ。志し。ふ。す。る
を。豫よ。て。も。ま。さ。け。バ。あ。の。根ね。六む。よ。替か。ら。ひ。て。移うつ。り。と。ら。ぬ
さ。ぬ。の。引ひ。出だ。物ぶつ。あ。ま。ご。個こゝろ。へ。を。持も。つ。せ。て。高たか。井い。が。社やしろ

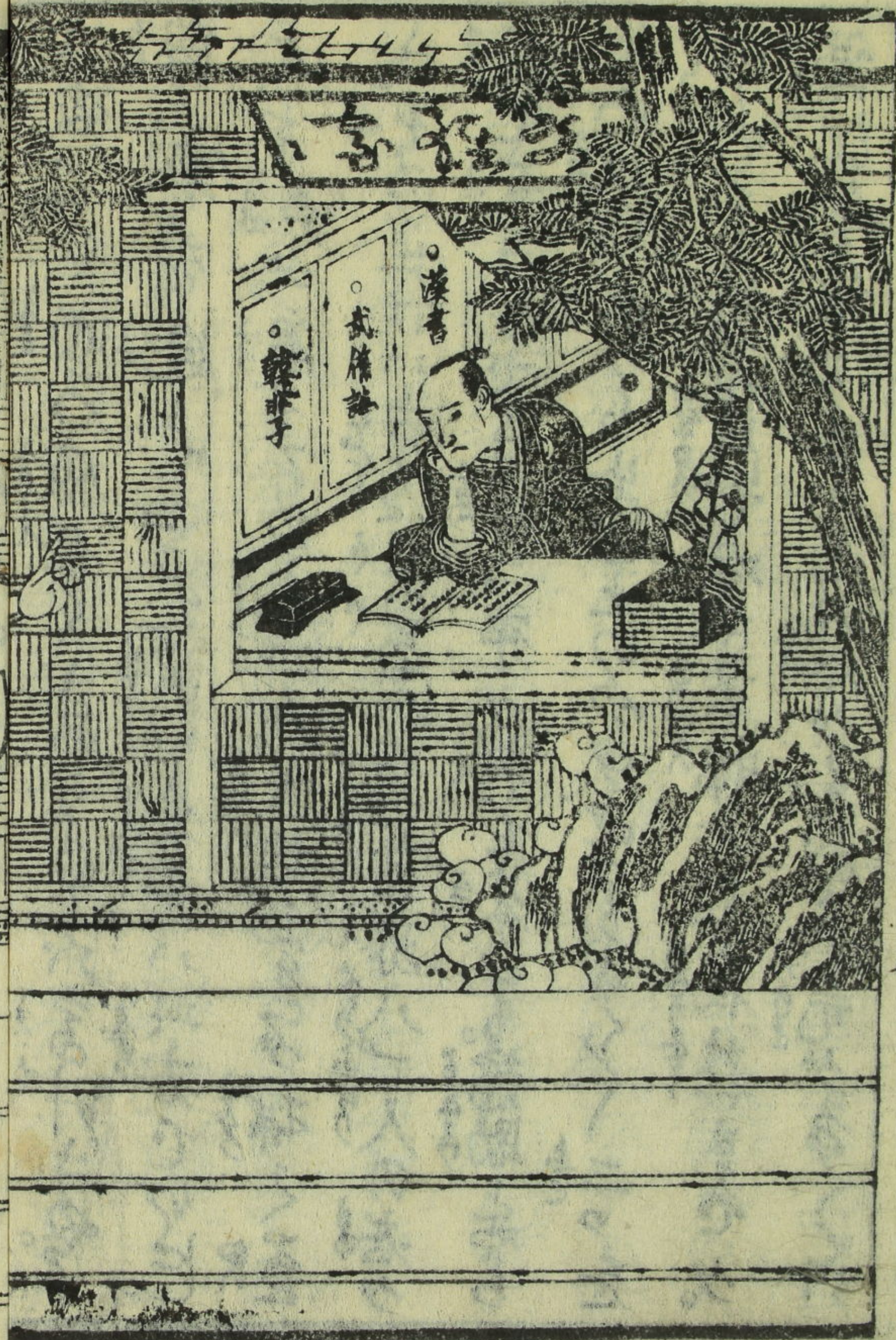
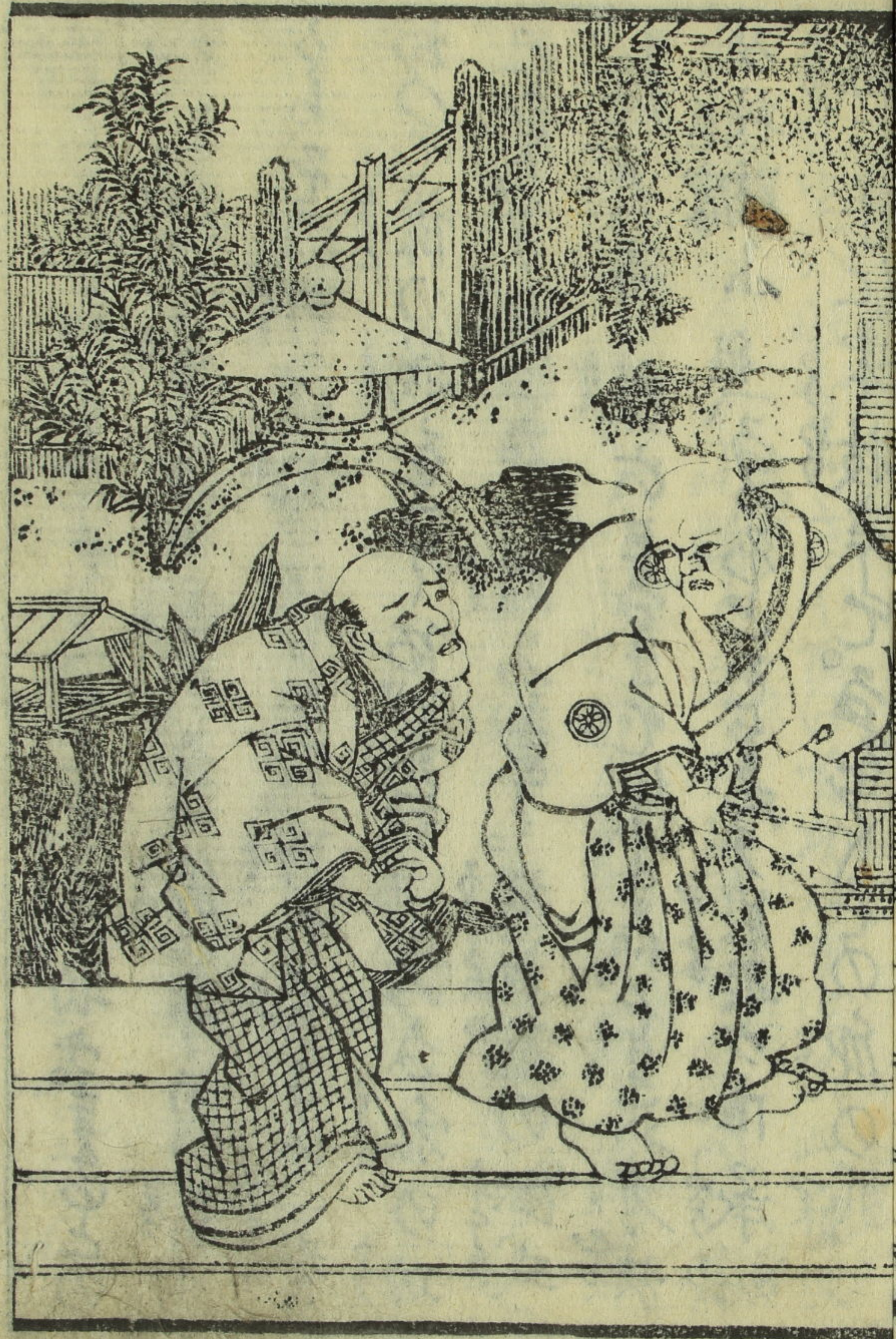
三ノ五巻

五

へ送らまかり。さる井ハこまをらけ納め。根ちの向ハ
 てりのあやう。戸ハイヤ、ヤモハさあぐの。心ばるハ痛をら
 るるやど。深二帝が罪の工。身共も業知りてて
 居るが。外侵人も列坐の中。まろくぢあも仕方
 るい。そんなら直不許してと。あめもそのあゆり
 ぬて。りも深二帝が穿抜して。逆さこりあて
 がさむす。その仕法を新く。せと身には
 低語バ。根ハ忽地承知して。根ハぐる。冠言の井
 さるイヤ、ヤモる感心く。さあぐる。さる井さる。ア
 深二帝を逆してあて。室の金美ハ此方でのじ
 戸ハイヤ声が高イ。その室ハる。大概あまが探る。逆
 こと。その正けハ古及具屋の用義。珍ハ二人の老が
 持てまき。おと深二帝が持てまき。慈助とあら
 りの老の。さあら出て。このあて。さる。よしく。二ツを
 照してえれば。屋物よが華勢うら。表柱まをが。
 体には。候。さるんと此処が。さる。元が。さる。てハ

五川五編中

六



五川五絲由

五

僕ら色申心。そらうて見るとそぞ助か。まのよの
 物を持って居るふも遠入るの。深二希めハ恙イ
 うら。その所ハ氣がはるお入ハ野で考さる一膏
 おつて。殊の物をさくあびまぶ。報へみる私の功
 せり。ア深二希ハ罪ふあや。堀兼屋の器式
 をバ戸へあト報六まるまじしよまん。そまハ身共
 が此胸ふ報入るるどそまあ。因取が店承知。
 深二希に申扱さして。るをくその此の罪
 増せ。宝ハ此方でさくあびて。功ハまじく此此に
 あり。其いくト小踊く。三ヨリまて獄食へ自死案
 番その外役人ふ。多くの金を終格。深二希
 ふ遠さくも預ひふ。色バ内く。めて牢のには
 あひせらる。報六ハまじと因をさる赤め。報マア若
 目取う私ハア。報六めでびざりまを。ひようんるど
 うら。色く。由苦勞るまじし。其よを。イヤ怪く
 けらぬ。實物を。お持るまら。こたの。ありぞ。よんる

三川五續五

十

野に入らねて。さぞ由窮屋をいぼのままや。且此も
 お世安さるもお案づるもさして由説ヤスも洞の種
 それゆへ肉をさる井さる人お預ひかまして野ゆへそ
 迹さよりらるとおひゆるさるにせよ。またその仕
 法はる新のせよと。おらもまはしと依語バ深
 二弟ハ木女細小き。親るまバこそ不孝る子を。
 夫程すてにやゆゆ。さ井さるへも心を入て。
 由苦勞方るもさして下さるハ。て勿解るんあうん。

とあつむと儘さつとと。根さるるを声を依れ
 報へそんるら晚よ私づ。おひてに侍ヤ。居りまは
 くら。深へ何う何までそる。この世籍。そんるら
 ぬあつむせいの。種を相圖小。報へ合意でござい
 ます。まことそ是より此処をさ物く。家になく
 是バ井さる支ぬも。息をさるより。今日の首
 尾。いづくと氣をあせる。根さるに晚まより
 報へさるるハよと。おあんど。さるる。晚あつむ。宰を

三川五巻中

九

おしやくちて。一ト先お迎へ。ヤス様り。あつて内へも
しきられませぬ。正に私ハ此胸に。あつと袖め
ておたはして。トいと信じて。ヤスあぞ。夫婦ハ
心おち居て。そんなら。ぞ銀おや。程よく。正に
と討らうと。恃むもいと。吾子の難く。まぐ
おあんど。あると。その日の暮を待たるく。
たや更。こころ初夜の鐘時。もこそあま夜嵐
に。山の木の葉も。をらくと。散らるる。くも死
なうハ。いと喜まを。涙より。時分ハ。うくと。銀
あま。守屋の。まき。皇と。落葉を。集め。は米を
佐と。豫て。準備の。越より。石橋。より。知く。幾矢と。
まき。屋敷。お移せ。ハ。燃ある。あ。の。火の。まき。に。守屋。の。書
ハ。周章。と。こめ。た。時。る。ぬ。に。お。人。を。放。を。何。の。の
よ。因。三。は。は。く。ハ。一。大。事。と。あ。の。火。を。防。ぐ。ん。を
た。め。に。表。の。方。へ。出。る。け。ハ。銀。お。透。さ。ま。と。踊。り。り。
備。の。捨。子。を。ら。ち。破。り。難。く。扶。い。ご。せ。く。と。

玉川五編中

け發動はつどうふ人もあつた深こゝろ一帯ハ根ね六むが計波ていばふ
 ありて扶たすらる枯魚こぎょ大洋おほやうの波なみをこえて踊おどりし
 んとまゐる下したへ。漫まん子こ心勇しんゆうを傳つたへ鳥とり渡わたるりやも父ちち
 母ははの。お鳥とりをこえてるとまま上うりて。まま何地なにぢへも往ゆかん
 と。語ことりにいふと根ね六むが。そをいハ危あやくあむ程ほどにまかかく
このを此場このまハおちり空あかの在あり家いへさへ急いそぎする。遠回とほまひの罪つみ
 ハ赦ゆるさるらるらとと堅かく判はんして家いへへからかへへ。もも非ひ
あつたら此この地ち知しりて根ね六むが。いいて西にしへ東ひがしへまり。
 ささと驚おどろきとあつたやう。お貫つらが實まことの心こゝろあつた。ははつつきき勢いき
 に身みを沈しづめ。やううくくああつつたた一ひと油あぶらも。實物まことものううて
 鹿かの罪つみの。ううととぬぬりりするら後あとささうう。そそををここににつつききても。
あつたら十じふ日にちのらちちああつつたた身みららんと。ひひててああを
あつたら半はん月げつのらちちああつつたた身みららんと。ひひててああを
 あるらるらるらるら。ちちるらるらるら。此この日ひににややりりて居ゐるらるらるら。様よう
 ううややもも早はやくく密ひそかかああつつたた遭あつつてて詔みことををもも詔みことらん
 と。ああつつたたららああつつたた甲州かうしゅうのらちちああつつたた高井たかゐ

井川五郎中

廿

戸街^{とらどろ}乃^を馳^はせ^はる^ると^たた^た夜^よハ^を也^や五^ご更^げの^の波^{なみ}み^く
 て[。]曉^{あけぼの}跡^{あと}の^の月^{つき}の^の氣^き山^{やま}の^の木^この^の間^まを^をち^ちろ^ろく^くと^と編^あり^り
 う^らつ^つま^まる^る田^いの^の面^もの^の方^{かた}より[。]一^{ひと}人^{りの}の^の女^を馳^は来^きア[。]ま^まり^り
 遠^{とほ}ひ^ひは^はき^き強^{たか}ゆ^ゆく^くを^を怪^{あや}ま^まる^る深^こ二^{ふた}糸^{いと}。あ^ある^るこ^この^の藪^{たき}
 落^おち^ちま^ま惶^{おそ}つ^つ。ま^まく^くマ^マ重^{おも}バ^バ平^{ひら}風^{かぜ}似^にたり[。]を^をま^まく^く廻^ま
 叩^{たた}や^やと^と男^{おとこ}み^みに^にほ^ほぞ^ぞ跡^{あと}より[。]ゆ^ゆし^し足^{あし}早^{はや}く^くそ^そま^ま又^{また}往^ゆの^の
 お糸^おさん^{さん}。今^{いま}此^{こゝ}を^をら^らし^して^て何^{なん}処^{どころ}へ^へか^かり^りぞ^ぞと^と声^{こゑ}か^かけ^け
 ら^らま^まて^て彼^{かの}女^をも^も。あ^あり^りぬ^ぬり^りし^しが^が物^{もの}を^をも^もい^いた^た。遠^{とほ}
 足^{あし}い^いど^どぞ^ぞま^まら^らと^とあ^あく^く。不^ふ審^{しん}を^をま^まお^おど^ど跡^{あと}に^につ^つた^た。何^{なん}
 か^かま^まむ^むの^のと^と迹^{あと}た^たり^りし^しが^が。ま^まら^らと^と吹^ふき^きま^まる^る山^{やま}下^{しも}風^{かぜ}も^も飛^ひ
 雲^{うん}忽^{たち}地^ぢ月^{げつ}光^{こう}を^を掩^{おほ}へ^へバ^バ如^に法^{ぽう}鳥^{ちう}王^{おう}の^の。双^{ふた}尺^{せき}も^もこ^こら^らぬ^ぬ
 暗^{やみ}の^の夜^よの^の。ま^まら^らぬ^ぬ往^ゆ方^{かた}ハ^ハし^しれ^れざ^ざり^りたり[。]深^こ二^{ふた}糸^{いと}希^{まれ}の^の黙^{もく}
 然^{しか}と^とま^まら^らぬ^ぬ吾^{われ}心^{こゝろ}の^の裡^{うち}ふ^ふ。日^ひお^おろ^ろ恋^{こゝろ}しく^く思^{おも}ひ^ひ居^ゐ
 と^とま^まら^らぬ^ぬ狐^{きつね}狸^りの^のた^たぶ^ぶら^らう^うま^まら^ら。ま^まら^らぬ^ぬま^まら^らぬ^ぬ心^{こゝろ}の^の鬼^{おに}も^も
 影^{かげ}を^を。往^ゆ方^{かた}知^しれ^れぬ^ぬぞ^ぞ是^{こゝろ}誰^{たれ}も^もま^まら^らぬ^ぬ。い^いま^まく^くこれ^{これ}
 より^{より}大^{おほ}磯^{いそ}へ^へ息^{いき}ぐ^ぐん^んの^のこ^こ心^{こゝろ}を^を定^{さだ}め^め。岳^{たけ}川^{がは}ま^まら^らぬ^ぬ

五洲五編中

五

いそがしく。爰におぬさま指を折首を伸し

て音信を令うくと待ぬ事と氣もるたまの

浮寐鳥よと定めぬ身の行さまさめく業

ふとてあるもあらまぬ物あひるんむも

心ましくは身心還られつる心あつた

と。氣も魂も身に替らぬを。いつそ此処等の洞

川へ此を流れんと人とも差もいつるか辨状

ありて尋ね底もあらむもあらむまじ

あつて良人ふすを。然るをむけんもあまはせ

不得九夫の浅はしく。あひせせばむくふ。あや

正しく入る。だがて只ねさよむ。まこと折とを

心あも。た淫言罵つて。物狂りき辨ふんを

るや。月を徑にたきと。後とく鬼神の神とつる

みる。巴。か貫を心ふ。あや。はく。毛を染二

界が。心。あつ。疑ひる。まこと。夫を恨んでし

死る。跡で。六人の。日の。橋。疾妬の鬼といへる

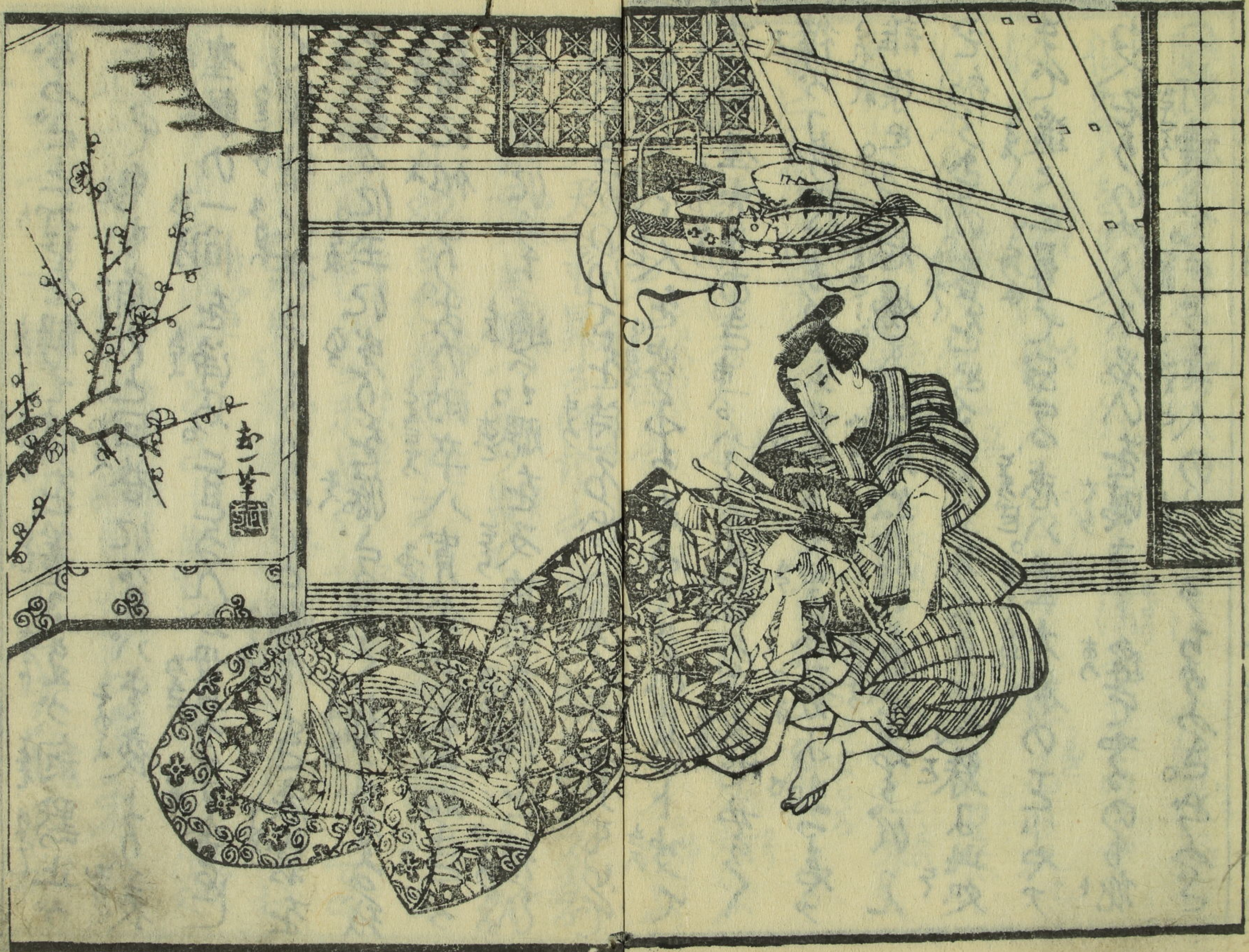
奮ふる。何なににしても生るまう入一こびあめてあらひ
 のまひのあめて死ぬのが誠ぞや夫そのにつひても此衆
 の主人をいじく懐あら人のまく高たか金かねをおく索
 めくるは身とりいぢ氣遠の喜よろこ似にまるをこをて殊
 とあひ心をこく痛ちるののをあらバは此の罪
 深ふかくはじやは身を活さとも室の代に活く此
 の操ハいえぬ言の根ねぞまをに慍いふとろと独
 ちあらを劬あらすてそのゆゑ日ハ主人に向むも
 ちや病も息とぬけのゆり勢をいぬくませら終
 しくこうらさるぐと最し大のは苦勞うけはしこと美
 面ありて市いち野の屋やハ自のはじめこうら守つとあらひ
 りの伏ふくも知らぬも女を心の狭せまく不さとと
 ちろこ念力でマン氣き遠よ乱らん心よと人あらひえ
 勢せからにるまろく勢せにあることハ急いせりそがぬ
 かりるののいまく心が着つららよく篤いとと落
 はりくまをまらしららららと懸一ま何も

五川五經中

十三

身にまきて嬉々たる心の裡、世にまじく
 して勿解るまい。今まをだんく、世にまじく
 の志よりあたる。まじく何処もるえん、世にまじく
 世へもまじり人並よ。客人をも務めたる市へま
 言とるらあふともまじく。まじくまじりあつても。
 二三日ハ保養して。まじりて見世へもまじりあつても。
 大きに安業がうらま。早くまじりあつても。まじりあつても。
 そまじりあつても。まじりあつても。まじりあつても。
 りよ入ぐ。あめ入ぐ此処へまじりあつても。まじりあつても。
 といそしつて。此病に泊してまじりあつても。まじりあつても。
 めてまじりあつても。毎日毎先病氣ハまじりあつても。まじりあつても。
 の女を使によまひと尋さる。あめ入ぐ。あめ入ぐ。あめ入ぐ。
 あれのと。いとまじりあつても。まじりあつても。まじりあつても。
 卒八命ハまじりあつても。まじりあつても。まじりあつても。
 の甚月くら。は身を揚て客とる。まじりあつても。まじりあつても。
 きん心も何ハ鬼もあまはまじりあつても。まじりあつても。まじりあつても。

此のう入るれば。誰に縁寐しゆふに足程也。
 彼卒八を客とするは。元より遙みとあるを
 に。人のに駕に掛らん。と心取う。三野なるれば。
 いろなりて卒八を。道き人ののと名ひつ。や。ハ
 その人の故なる居こと。た。家。ま。で。び。え。ん。と。度。く
 日。に。小。遙。る。と。ひ。ひ。く。こ。人。る。事。と。一。辨。心。よ。り
 らぬ人の。更。ま。び。る。く。扶。投。して。お。た。ま。う。所。り
 體。小。る。つ。こ。も。人。僥。倖。小。と。来。は。し。こ。う。が。成。ふ
 正。あ。ら。は。人。を。客。中。と。あ。て。く。る。心。の。ト。変。て
 市。野。屋。大。に。あ。き。市。ハ。ハ。く。る。る。程。多。夫。で。か。ら。く
 律。が。つ。ら。つ。こ。あ。じ。お。貫。よ。く。笑。み。勢。小。出。つ。ま。ア
 誰。渠。と。マ。ア。忘。憶。も。出。来。ぬ。こ。け。氣。心。志。を。び。え
 ぎ。あ。ら。む。の。客。を。さ。る。より。あ。ら。う。け。入。殊。も。此。如
 き。で。遙。と。尋。て。お。る。志。ハ。並。大。辨。の。と。ト。や。ア
 お。入。そ。う。り。人。ふ。あ。ひ。を。晴。さ。一。途。で。やる。の。も。能
 の。祈。禱。や。且。し。う。素。人。の。此。う。ち。う。め。お。お。ん。と



吉二筆


ぶらぶらと髪を解して、髪を籠るまじ、詞黙止が
 たくて、鬼も角のと回答に、さばを夜よりの表
 座敷の一間を浄め、とさるえんお貫が子舎に
 髪結化粧さすうみ。いと輝々さき衣裳を
 着さるに、玉に光りを添ふるどく綿よたる我
 蓑に似たり。その時卒八寛介と。おぬまごが
 子舎にうち通ふ。腮を及せて、夜紋を繕ひ
 おぬまごの髪を待るおぬま。来てお貫もいそ
 ぎさば。天へも昇る心地と。漫に胸もおぬま
 通ふ。お貫を側へとり寄て、おぬまはるま
 実子此処まで来る下さる。お志はうすれま
 せん。ぶらぶらと末長く女房とあめさくさ
 さんせ。サアはさうら夫婦も同共。あらくり一ッお
 あがりよと。髪結さくさく髪結さくおぬまがけ
 へ来る目くらむ髪結さく病氣とやら。そのまら
 りの久し。髪結さくまらなりと。おぬまはさる。夫小祈

五川五編中

十七

しておまへに遭あつた。さへはもの心障こころさわつとあるのみよト
 ひをまて此こゝ方かたハ足の踏ふまの舞所まいどころも覚おぼえぬ
 まで。続つづとて卒つひハグ。まことうらひる大おほさうづき。
 マまうと。ま一いちつと。強つよつひらして飲のむに。是こゝを
 ひあろくまのまらむ。お貫ぬきが膝ひざを枕まくらとく。
 前後前後もあらぬ高たか刺さ。おぬきハせんまると仕し課かせ
 たり。今いま宵よハけりぬとぞりんと痛いためる。徳とくも
 我われも。世よぐ伏ふ士し世よおたなる。漸おそくそ夜よも
 二更ふたごの泣なる。夜のぬるにも寝ねもあり。床とこへ寐ね
 やしめん。と甘あま。忽たち地ち目めさめて醒さる。るをせん
 せらひゆるる。ゆるはせんともよ所ところよ表おもての潜ひそ
 戸とるくと音ね信しん声せいの笑わら。まど宵よるる。まを
 主ぬしをち。寐ねする人もる。たまふ。一人ひとりかひぐ
 誰たれどと問とバ。仕しむるもの漢かん子こにて。目め化粧けいそう扱あ
 の市野いちのの屋やを。は知してごらり。まらう。ハイて
 ひらり。まら。お出でる。まら。男おとこハイテ

新川五郎中

十九

我々^{われら}の亭主^{ていしゅ}に。ちよるとは^{おの}同^{どう}よから^よて^て。是^{こゝ}に
 まゝおゐる^{まゝ}中^{ちゆう}は^はし^しこ^こと^と笑^{わら}む^む主^{しゅ}ハ^ハ是^{こゝ}に^に居^ゐる^るに^にて^てハ
 市野^{いちの}屋^やで^でびびり^{びびり}の手^ての^のひ^ひぎ^ぎ。あ^あま^まこ^こハ^ハさ^さび^びし^しう^うら^ら男^{おとこ}
 一^{ひと}人^{にん}が^が店^{てん}亭^{てい}主^{しゅ}。此^{こゝ}方^{かた}へ^へ先^ま次^{つぎ}お^お貫^{ぬき}と^とま^まな^な
 公^{こう}人^{にん}を^をお^おる^る真^ま実^{じつ}を^をの^の。慾^{よく}助^{すけ}と^とり^りお^お老^{らう}ら^ら。お^おか^かく^く
 る^るま^まじ^じと^とび^びび^びり^りの^のま^ませ^せら^らる^る。市^{いち}ハ^ハる^るる^る。頼^{たの}け^け方^{かた}を^を抱^{かか}
 へ^へ。ま^まじ^じと^と何^{なに}ぞ^ぞ用^{もち}を^をお^おり^りま^また^たう^う。男^{おとこ}ハ^ハさ^さま^まじ^じに^にその^{その}
 女^めふ^ふ。少^{すく}く^く用^{もち}る^る。う^うご^ごび^びび^びり^りの^のま^まま^まと^と。ち^ちよ^よと^と遠^{とほ}く^くと^と
 下^{くだ}さ^さる^るま^まい^いう^う。市^{いち}ハ^ハそ^そま^まじ^じに^に何^{なに}よ^より^りお^お安^{やす}い^いと^とサ^サク^クけ^け方^{かた}
 へ^へあ^あの^のう^うら^らま^まる^る。せ^せへ^へト^ト見^み世^よふ^ふ。続^{つづ}き^きく^く傍^{かたわら}の^の小^こ倉^{くら}へ^へ
 通^{とほ}じ^じと^と主^{しゅ}ハ^ハ是^{こゝ}に^に居^ゐる^る。箱^{はこ}を^をお^おり^りま^また^たう^う。階^{かゐ}子^こハ^ハ多^{おほ}く^くと^と。並^{なら}下^{くだ}
 へ^へて^て障^{しょう}子^この^の破^{やぶ}目^め。呪^{のろ}い^いけ^けバ^バそ^そま^まじ^じと^とお^おぬ^ぬま^まを^をか^かひ^ひ
 け^けり^り。物^{もの}を^をも^も言^いふ^ふと^と男^{おとこ}の^の。膝^{ひざ}ハ^ハ面^{おもて}お^おく^くあ^あて^てて^て。日^ひあ^あ
 せ^せる^る。是^{こゝ}に^に居^ゐる^る。は^はは^は二^に糸^{いと}る^る。か^かこ^こて^て脊^せ中^{ちゆう}を^を
 搔^かき^きま^ます^す。無^なし^しに^にお^おぬ^ぬま^まを^を遠^{とほ}く^くと^と居^ゐる^る。さ^さま^まを^を
 待^{まち}た^たぬ^ぬと^とあ^あて^てて^てら^らる^る。さ^さま^まは^は音^ねを^を聞^きく^くる^る。容^{よう}

形かたちのなや勢をあるのりおし人ふ別をて
 今いまももも遠ある一たる此のはらさ。是こも良
と人の為とあらて。居おもどさるをり海うちをるく。
り若もあま人の氣きがあらと捨はてられらと女子の愚か
ち癡おのこが積のこ糸やうく活いきて居おまうと。
まこ伏沈むをきくはらさ。立た勝六勝も断ち離る
あらぬ縁へうをも去るら折せらるをも骨こ
あらて取と戻しと一抽ハ何にもあらぬ便べのの
あらて夫と新しりの憂う目ふあらぬをく重重と徳と助め
を捕とりて穿せん美もしたたれとそるをうさらと也憶んで
あらら。待まりて居おもうと夫をるを床ても覚えても一年ら
まただ。一く遠あるその便を説まうう人をあらるのと。
あらて此如くもあらぬのと也と笑うらるもおもが顛列り
いまもあらるら。掛かけ物ハあらる便で夫をあらるあらるく罪
を重う重ととも。ホニあま人も私しもいらる業のあらるひ
やら。牙を沈めても取と戻しとうあらぬがあま人の難え

三川玉糸

十一

後きにいまを昔こ前ごが心こがら。人ひとに詐ま愛まさまとあまし人ひともまを
 苦くる勞らうをまままとまりまのの。おおをを堪かん忍にんと下くだささと下くだ能の
 も洞どうのの後ご回かいるる。怒いかききをを啗だんぞぞるる野の小せう二に階かい
 にてに答こたととあありりくく漢かん子しのの声こゑ。おおををいい何なに処ところへへおおををいいと
 大おほ音ねああびびてて喚こゑるる。仲なつ居ゐのの聲こゑとと妓こ氣きハハ。いいま
 淨じやうももにに佳いししららとと些ち三さん待たいてていいををももまままま淨じやうもも大おほ
 振ふりり多たああるる。大おほくくとと耳みみくく寐ねてて居ゐるとと多たくくとと遠とほ奴やつがが後ご
 おおととここららううががそそののハハいいのの取と。酔よてもも不ふ通とぬぬアアととままををねね入い
 そそととまま也や考かうををととくく及およぶぶ。音おと笑わらつつけけてて深ふか二に希きがが。
 ととハハおおををいい今いま宵よの時とき宜よろ祈いのとと語かたるるとと語かたるるああぞぞ眉まゆをを
 頻しばしばめてて深ふか二に希き「こゝろをを使つか侍しやうははおおををいい。そそるるここよよ己おのれ
 がが一ひと生せいのの特とくととああるる協きやうへへとと是こゝろををぬぬらら。ままままととおお
 ままをを改あらととままとと。おおんんるるららいい知しららるるいいがが命いのちるるららととも
 るるららいいとともも。深ふか一ひと歩ふそのの特とくとと外あはででああるるいいがが。卒そと八はちと
 慾よく助すけめめハハ。惡わる見み仲なつ間まのの只ただ身み因よにに彼か一ひと曲まがハハ慾よく助すけ
 めめ持もてて居ゐるるはは。遠とほららいいとと用もち意い。地ち八はちとといいとと二人ふたりのの

乃其屋なりこども室むろの一油いちあぶらを。きりきりよよるる貨物あやりのあるまじは。
 罪つみによよりりくくおおままとと一野いちのよよ牢らうに居ゐててののそそのの殺ころ害がいをを
 してしておおれればば卒そつ八はちををららままくく懸かりりてて懲ちやう助すけがが所しよ持ぢたるた珠たま
 の一油いちあぶらををややりり戻もどすすののままとと一通いちとうででままるるくく性じやうど
 ともともくくよよ夫むすををどど心こころををううけけてて居ゐるることこと僥たう倖じやう卒そつ八はちををどど不
 へへ變へん詐さしてして宝物たからものをを引ひききりりてて二面にめんハハああるるゆゆへへ。そそううままへへる
 玉たまとと牢らう拔はくしてして逃にがすすもも何なにももささるるままりりとと此こゝ處ゝのの法はふみみ
 親おやのの難がた美みもも清きよをを仕しままふふここののああややあありりくく祈いのち
 るるゆゆへへ。そそううくくのの脅おそ力りきででままりりままりりつつおお又また操さうをを捨すて
 操さうにに懐なつふふるる盤ばんのの前まへのの故こ事じももあありりままりりゆゆめめのの女によ
 房むらうにに身みをを残のこささしてしてはは身みのの罪つみをを道みちととんんといいふふ腰こし拔はくのの
 世よににままむむ甲かぶつ斐ひももるるあありりるるねねどどおおままハハ死しんんででもも仕しま
 りりつつ。親おやのの路みち美みががままりりつつれれぬぬああののるる程ほどををままりり
 ここひひてて。ちちここおおまま面めん目めるる。いいままくくあありりをを瀬せ川がわへへ能あた
 をを洗せんめめててままままりりつつるる。ゆゆめめここひひてて。ぐぐ肉にくををししりりててままりり
 づづんんるる怨うらみみのの法はふののゆゆめめもも何なに願ねがひひままりりつつるるああのの人ひと

かのり^{ふん}は^ま續^り氣^るる^まと^まら^くと^まあ^りて^ま勢^きき^をう^めと^まと^まえ^ん
 ま^まる^しと^ま書^れふ^もあ^らむ^を抱^きは^は死^に行^く漏^るる^かあ^らう^ま
 ま^まむ^もの^ま碎^くた^らる^まら^う

玉川日記五編卷之五

